

## 近代日韓唱歌教育と西洋音楽

—日本と韓国の音楽の近代化をめぐる—

小田 敏花\*

### **The Singing Education in Modern Japan and Korea and Western Music:**

A Study on the Modernization of Japanese and Korean music

Oda Toshika\*

#### **Abstract**

This paper attempts to illustrate how Japan and Korea had experienced the modernization of their respective musical cultures music with the advent of Western music in the late 19th century East Asia. As is generally known, Western music has had a tremendous impact on the development of each Japanese and Korean musical culture. Japan was the first Asian country that had achieved the modernization of music. Western music – particularly Protestant hymns – was first introduced to Japan by Western missionaries; on a full scale, it became prevalent through public school system. What is important is that the music education in Japan started as vocal music (shoka), which was strongly influenced by Western music. Just like Japan, Western music first entered Korea with missionaries in the late 19th century. But soon after the turn of the century, Korea was invaded and controlled by Japan, and the Japanese school system including the singing education was introduced there. From then to the end of the WW II, Korea had been put under the huge influence of the Japanese school songs. In short, modern Korean musical culture had been under the double influence of Western music and the westernized Japanese music.

Based on the above-mentioned historical backgrounds of the music education of both Japan and Korea, this paper first examines why Japan needed to introduce Western music to modernize its music – focusing on the fact that modern Western music had some strong points to meeting the needs of the times to create a strong, unified modern nation-state. Again both Japan and Korea first encountered Western music through Christian hymns. Western Christian music is said to have historically played an enormous role to unify people from different ethnic groups in areas of Christian rule; it had a peculiar musical structure, to which people could sing along with ease.

In conclusion, focusing on the role of Western music as a driving force of national integration, the author aims to examine what modernization (westernization) of music meant for both Japan and Korea and also what Japanese-model of the musical modernization meant for Korea.

---

\* 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程; Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University, Doctoral Degree Program.

## はじめに

本稿の課題は、19世紀末の西洋音楽<sup>1</sup>の到来によって、日本と韓国にどのような西洋音楽がどのような歴史的背景のなかで導入されることになったのか、そして両者がどのように「音楽の近代化」を経験し、またそのことにはどういった歴史的意味が含まれていたのかについて考察することである。

19世紀末の西洋音楽の東アジア地域への到来は、日本音楽と韓国音楽の双方に至大な影響を及ぼした。日韓ともに西洋音楽の導入が讃美歌と学校教育を媒介にしたという点で、先行研究は一致した見解を示している<sup>2</sup>。日本唱歌は、西洋を模倣した学校制度や教授法・教材などを通じて、讃美歌の影響を受けた学校唱歌としてスタートした。近代韓国では、開国後に来韓した宣教師によって讃美歌が移入され、ミッション・スクールで讃美歌の教授が実施された。ただし、韓国では、公教育としての唱歌は、1906年8月に統監府学部によって公布された「普通学校令施行規則」において初めて教科目の一つとして定められたことを起点とする。以後、韓国には日本風に西洋化・近代化された唱歌教育が移入されることになり、韓国唱歌は、西洋音楽とそこから派生した日本唱歌からの二重の影響を受けることになった。

本稿のテーマ、「近代日韓唱歌教育と西洋音楽」は、日本がアジアで初めて音楽の近代化・西洋化を実現したこと、そして、韓国は自力で音楽の近代化を果たす前に、日本の植民地唱歌教育によってそれが果たされたこと、といった近代化の複雑な連鎖性に注目した上でつけられたものである。換言すると、本稿は、19世紀末から20世紀初頭にかけて形成された日本唱歌と韓国唱歌を、近代という大きな時代背景のなかでみると同時に、日本植民地主義の文化支配という視点にも焦点をおいて考察するものである。そのようなアプローチをとることによって、音楽文化を自律的に閉じた領域へと限定せず、「政治や経済などの非文化的な領域から切り離すことのできない越境的な出来事<sup>3</sup>」として捉えることが可能となる。要するに、文化のなかにある政治性を見つめるというのが本稿の関心である。

以上のように、日韓双方の洋楽導入史と音楽の近代化過程の基本的な流れを踏まえた上で、まず本稿では、アジアで初めて音楽の近代化を果たした日本に注目し、明治期のエリートがどのような目的・意図で洋楽導入を図ったのかについて検証する。その際、日本の近代化の方向性を決定づけたといわれる岩倉使節団の欧米諸国視察のうち、音楽視察に焦点を当て、彼らが西洋音楽に対してどのような関心を示していたのかを明らかにする。さらに、西洋音楽による非西洋音楽の近代化という19世紀に起きた世界現象の背後には何があったのかを検討するために、日本が西洋音楽を学校唱歌教育に導入するにあたってお雇外国人として招聘したアメリカ人音楽教育家・

1 近代西洋音楽の起原は、中世のグレゴリオ聖歌にある。讃美歌と聖歌の相違は、讃美歌が、会衆全員に賛美され歌われるといった民主的な性格をもち、主にプロテスタント諸教会を中心に使用される宗教歌をさすのに対して、聖歌は、讃美歌に加えて、中世からの宗教歌、典礼歌を含んだ、より多義的な性格をもっているところにある。本稿で扱う西洋音楽は、こうした聖歌・讃美歌の流れをくんだ近代西洋音楽のことをさす。

2 日本については、中村理平『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房、1993年)、安田寛「唱歌導入の起源について」(『山口芸術短期大学研究紀要』第25巻、1993年)、中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996年)、安田寛「キリスト教と唱歌成立のダイナミズム」(松下鈞編『異文化交流と近代化——京都国際セミナー1996——』大空社、1998年)、安田寛『日韓唱歌の源流』(音楽之友社、1999年)、手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、1999年)などがあげられ、韓国については、安田寛『日韓唱歌の源流』(音楽之友社、1999年)、高仁淑『近代朝鮮の唱歌教育』(九州大学出版会、2004年)などがある。

3 吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』(人文書院、2003年)25頁。

ルーサー・ホワイティング・メーソン (Luther Whiting Mason、1818～96) と彼を日本に紹介したエーベン・トゥルジェー<sup>4</sup> (Eben Tourjee, 1834–1891) のバックグラウンドや思想、業績を検討する。彼らはともに敬虔なキリスト教徒であり、そのことは彼らの音楽観と密接な関連があった。この点を踏まえた上で、彼らが日本に導入した西洋音楽についてキリスト教との関連からも検討していく。そして、最終的に、音楽の近代化を受容する側と供給する側の交渉・折衝を通じて、日本がどのような音楽の近代化を目指すことになったのかを考察することとする。

韓国については、日本音楽の近代化との類似性を考慮に入れながら、ミッション・スクールにおける讃美歌の教授や民族系私立学校における愛国唱歌教育の活況といった現象に注目し、讃美歌を媒介にした音楽の近代化の初期過程を概観していく。1906年の統監府設置以後は、日本の植民地唱歌教育が移入され、韓国唱歌は日本唱歌から至大な影響を受けることになるのだが、それと平行して、民族系私立学校やキリスト教系私立学校で愛国精神の鼓舞を目的に唱歌が愛国唱歌として普及・展開していくという流れもあった。これらの点を踏まえて、韓国音楽の近代化については、西洋音楽と日本唱歌からの二重の影響を受けたという文化「交流」の錯綜とした状況に注目し、近代化ならびに植民地主義の二つの視点から検討していくこととする。

そして最終的に、これらの検討結果に基づいて、日本と韓国にとって音楽の近代化が意味したことについて考察する。

## Ⅰ. 日本音楽の近代化と西洋音楽

### 1. 岩倉使節団の西洋音楽体験

1871 (明治4) 年12月、岩倉具視、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳をはじめとした総勢100名の岩倉遣外使節団は横浜を出帆した。その主な目的は、欧米先進諸国の制度・文物を視察調査し、日本の近代化の方途を探ること、そして条約改正の予備交渉をすることであった。

とりわけ教育調査は、岩倉使節団のなかで最も重視されていた視察対象の一つであった。副使として参加した木戸孝允は、はやくも1868 (明治元年) 12月に、全国に普通教育を実施する建白<sup>5</sup>を朝廷に提出して以来、一貫して教育に深い関心を示していた。木戸は、サンフランシスコの小学校を視察した際に、「眞に我国をして一般の開化を進め一般の人智を明發し以て國の權力持し獨立不羈たらしむるには僅僅の人才世出するとも尤難かるへし其急務となすものは只學校より先なるはなし<sup>6</sup>」とし、国家独立の命運が、学校設立による公教育の普及にかかっていると述べている。木戸が文部大丞・田中不二麿に、とくに教育に関して詳しく調査させたのもそのためだった<sup>7</sup>。この使節団の報告は、『特命全權大使米欧回覽実記』 (以下『回覽実記』と略称) にまとめられ、1878 (明治11) 年12月に出版された。

このなかで、岩倉使節団は、西洋音楽に接触した際に、特に、学校音楽と国歌に関心を向け、それらを観察している。以下では、岩倉使節団が、西洋の学校音楽と国歌にどのような関心を示し、それらから日本の近代化に向けてどのような方途を探ろうとしたのかについて検討していく

4 ポストンのニューイングランド音楽院の設立者。

5 木戸公伝記編纂所編『木戸孝允文書』第八巻、日本史籍協会、1931年、78頁。

6 木戸孝允『木戸孝允日記』二、東京大學出版会、1933年、126頁。

7 田中彰『岩倉使節団「米欧回覽実記」』岩波書店、2002年、19頁。

こととする。

1872年1月23日、使節団は、米国・サンフランシスコの「ランマン」女学校を訪問した際に、地理、歴史、数学をはじめとする「普通ノ諸科」のなかに「唱歌」が含まれていることに注目している。唱歌が普通教育の一教科となっている米国の音楽状況は、当時の日本人にとっては、物珍しく思われたことであろう。なぜなら、当時の日本において音楽は、芸妓の余興あるいは遊芸の一種とみなされ、社会的に低い位置におかれていたからである。

一行は、そこで視察した唱歌の授業について、「唱歌ハ小学ノ日課ニテ、以テ天神ニツカヘ、人倫ヲ和ス、……（中略）……此後各地ノ小学校ニ至ル毎ニ唱歌ヲ諷スレトモ、常業ナルニヨリ、一々之ヲ記セス<sup>8</sup>」と言う。つまり、唱歌には「天神ニツカヘ、人倫ヲ和ス」というような効用があるという。つまり、彼らは、日々唱歌をうたうという行為そのものが神への奉仕となり、それが「人倫」をもたらすという唱歌の宗教的・道徳的な側面に注目している。当時の欧米の小学校では唱歌の授業に讃美歌を中心とした教材を使っていたことから、一行が聴いたのは讃美歌であることが推察される。「人倫」に注目し、音楽を観察する彼らの視点は、政治と道徳とを一体に考える儒教的な思考様式が反映されているといえるだろう。

次に、音楽に関して『回覧実記』のなかで最もページ数が割かれたボストンの音楽会、「太平洋会」についてみてみよう。この音楽会は、アメリカにおける南北戦争の終焉、ヨーロッパにおける普仏戦争の終結を記念し、世界平和を祝うことを目的として1872年に開催されたものである。使節団一行は、この「アメリカ音楽史上でも特別の位置を占める<sup>9</sup>」音楽会に出席した際に、興味深い音楽観を披瀝している。第二・三部のプログラムに出演した英国の軍楽隊の演奏について、次のような記録がある。

「此日ハ、英国親衛兵ノ楽隊、緋衣態冠シ楽会ヲ助ク、曲ヲ調スルー閥、英楽ノ美ヲ極ム、衆賛嘆已マス、更ニ一回ヲ望ム、米人独立ノ戦ニ虜ハレ、愛国心ヲ堅クシ屈撓セサル、一曲ヲ調セリ、米人之ヲ聞テ、感嘆已ム能ハス、手ヲ拍チ足ヲ踏ミ、シバシ鳴リモ静ラス、更ニマター一曲ヲ望メリ、嗚呼、五洲ノ内、大小国ヲ分チ、各其俗ニ安ンシ、自主ヲ遂レハ、皆我生国ヲ愛スルノ心ハ、勃起トシテ已ム能ハサルコト、猶其身ヲ愛シ、其家ヲ愛スルニ同シ、亜弗利加ノ民ハ、炎燭ノ域ニスミ、似謂ク是世界ノ楽地ナリト、露西亜ノ北境ニ住スルモノハ、轎車ニ乗テ氷上ヲ輾リ、露京ニ来リ、氷ノ方ニ解ントスルトキハ、又車ヲ回シテ帰ル、此土ニ育スルモノハ、其土ヲ愛ス、猶草木ノ根ヲ託スルト一般ナリ、故ニ愛国ノ心ハ、人情ノ自然ニ発シ、忠厚ノ根元トナルモノナリ、欧米ノ民開化ヲ論スルハ、愛国ノ心ヨリ始ル、若シ其身ヲ忘レ、其家ヲ棄テ、其故里ヲ顧ミス、其国ヲ厭フモノ、如キハ、我名教ノ罪人ノミナラス、抑モ西洋開化ノ取ラサル所ナリ、欧米ノ民ヲ育スルヤ、先ンスルニ国史ヲ教フ、愛国心ヲ導ク所ナリ<sup>10</sup>」（下線筆者）

まず、この記述において何よりも目立つのは「愛国心」という言葉であろう。ここでは、演奏内容や演奏評価など音楽学的な視点からの記述はほとんどない。第三部のプログラムの詳しい内

8 久米邦武編／田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』（一）、岩波書店、1985年、88-89頁。

9 中村浩介『西洋の音、日本の耳』春秋社、1987年、68頁。

10 久米、前掲書、297-298頁。

11 奥中康人『国家と音楽』春秋社、2008年、71-77頁。

容については、奥中康人の研究<sup>11</sup>で「太平楽会」関連の史料から明らかにされている。それによると、英国の軍楽隊は、まずマクファーレン作曲の《ロビンフッド》序曲、ウェーバー作曲の《魔弾の射手》序曲などを演奏した。その後、米国側から女性歌手、オーケストラ、指揮者、合唱団が参加し、共に英国国歌を演奏し、その返礼として軍楽隊が、会場のアメリカ人を一同に愛国の歓喜に湧かせた「米人独立ノ戦ニ虜ハレ、愛国心ヲ堅クシ屈撓セサル、一曲」つまり、米国歌《星条旗》を演奏した。要するに、『回覧実記』の記述は、米国歌の演奏に沸き立つ米国人の愛国心が喚起する模様を描いているというわけである。

注目されるのは、その後、アフリカやロシアに住む人びとの愛国心に思いを馳せ、「愛国ノ心ハ、人情ノ自然ニ発シ、忠厚ノ根元トナルモノナリ」と愛国の概念を人類に普遍的なものとし、それを忠孝の根源としてみているところである。さらには、「欧米ノ民開化ヲ論スルハ、愛国ノ心ヨリ始ル」とし、開化とは、「愛国ノ心」に発するものであるという主張に収束する。

以上によって、岩倉使節団は、西洋音楽との接触の際に、常にそれを国家の成長や繁栄と結びつけながら観察していたことが明らかにされた。讃美歌を教材として用いた唱歌の授業を視察した際には、その神聖で清逸なところに感銘を受け、そこに道徳的な裨益を見出した。そして、最後の英国の軍楽隊の演奏についての記述では、その後の日本の教育政策の基礎となる愛国心がクローズアップされ、それが文明化の礎となると結んでいる。その後の日本の唱歌教育の展開で愛国心や忠孝の概念が中心的な役割を果たしていった事実を鑑みると、この岩倉使節団による西洋音楽の視察調査が、その後の日本唱歌教育の基本的な性格を規定したといっても決して過言ではなからう。

## 2. 日本音楽の近代化とキリスト教

前項で述べた「太平音楽会」に実は、日本音楽の近代化に目立たないが至大な役割を演じた人物が出演していた。ボストンにあるニューイングランド音楽院<sup>12</sup> (The New England Conservatory) の設立者、エーベン・トゥルジャー (Eben Tourjee, 1834-1891) である。「太平音楽会」では、第三部のプログラムの最後の演目であったローウェン・メーソン<sup>13</sup> (Lowell Mason, 1792-1872) 作曲の讃美歌で指揮をつとめた。彼は当時の音楽教育界の重鎮で、アメリカの音楽教育者の組織である Music Teachers National Association の初代会長にもなっている<sup>14</sup>。彼は、「太平音楽会」の聖歌隊の組織化に尽力した人物であった<sup>15</sup>。つまり、岩倉使節団が聴いた大合唱団は、トゥルジャーが組織化した大聖歌隊であったということになる。これは、トゥルジャーが、キリスト教の宣教の方面から、公立学校に唱歌を導入することを強く主張した熱心なメソジスト派プロテスタントであったことと関連があるだろう。

トゥルジャーの日本唱歌に対する何よりも貢献は、日本の音楽教育に西洋の音楽システムを導入したお雇外国人、ルーサー・ホワイティング・メーソン (Luther Whiting Mason, 1818-1896) を日本に派遣したところにある。メーソンは、1818年、アメリカ、メイン州ターナーに

12 このニューイングランド音楽院には、政府給費留学生の第1号である幸田延が留学している。

13 ボストン音楽学校 (Boston Academy of Music) の設立者。教会音楽家として多くの讃美歌を作曲しただけでなく、音楽学校の運営を通じて、アメリカの音楽教育振興に多大なる貢献をした。お雇外国人、ルーサー・ホワイティング・メーソンとは別人物。

14 手代木、前掲書、179頁。

15 同前、178頁。

生まれる。教会の聖歌隊で歌ううちに、音楽の才能を開花させ、成人して音楽教師となった後、音楽教育家としての道を切り開いていった。彼は、日本に招聘される以前、すでにアメリカの公音楽教育において大きな実績を残しており、それは彼が考案した『音楽掛図<sup>16</sup>』という音楽教具によるところが大きかった。

1873年、岩倉使節団の帰国後、文部大輔に就任した田中不二麿は、西洋音楽の導入のためにはお雇外国人が必要であると考えていた。そうした緊急を要する国家的課題が、トゥルジェーのメーソン紹介につながってくるのであった<sup>17</sup>。

しかし、日本ではやっと近年の研究<sup>18</sup>でトゥルジェーの存在が取り上げられるようになってきたが、それまであまり彼に関心が寄せられることはなかった。メーソンについても、音楽教育史あるいは洋楽史の中での役割に焦点を置いた研究が主流で、その全体像を考察した研究は少ない<sup>19</sup>。手代木は、その理由は、「今までは音楽とキリスト教を、すなわち唱歌と讃美歌を別々に研究していたため、音楽と宣教の結びつきが見過ごされていた<sup>20</sup>」からであるとしている。しかし、最近彼の来日の動機の中に宣教の意思があったということが注目されるようになってきた<sup>21</sup>。メーソンは、音楽教師としての顔のほかに、熱心な会衆派プロテスタントという顔ももっていた。次の資料<sup>22</sup>は、メーソンが日本での音楽活動を通じて、宣教における音楽の力について感じたところを紹介したものである。

「(中略)偉大な音楽の試みを遂行するためにメーソンが望んだ設備はすべて彼の自由にまかされた。その試みとは、いわばはじめから彼が始めなければならないものだった。なぜならば、異教徒である日本人は、我々から言わせれば、音楽について何も知らなかったのです。彼らの音階は5音で構成されており、日本人の耳を、実際の音楽の基本となる完全な音階に合うように、現実問題として調整していかなければならなかったのである。(中略)何と、日本人を音楽的な国民にすることに着手した音楽に満ちた宣教師の行動は、コロンブスに新世界を発見させたような信仰と初心をつらぬく勇気を、まことに我々に示している。そして、我々は、彼の信仰が報われることに疑念を抱いてはいない。なぜならば、音楽とは神の力によって魂に植えられた最も重要なものであり、もしそうでなくとも音楽はわれわれの人間性のいたるところに共通に存在するという可能性を我々が信じているからである。アメリカは神の御業を日本人に実現させるための最適な人材を、その鍵穴に合う鍵とともに送り出したのである。そして、その日本人は、多方面にわたる教育を国民が受けることの重要性を認識

16 音楽掛図とは、地理の時間に使う世界地図のように、生徒の前に立てかけて使う大判の楽譜のことをさす。幅90センチ、高さ63センチほどの大きさで、専用の台に立てかけて、教室全体からみることのできる教材であった。

17 1873年、岩倉使節団の外遊から戻った田中不二麿は、文部大輔として唱歌教育の創設に向けて奔走していく。伊沢修二は、そうした田中の唱歌教育政策を支えた重要な人物の一人であった。伊沢は、1875(明治8)年8月に当時のアメリカでベスタロッツ運動の中心であったマサチューセッツ州立ブリッジウォーター師範学校に留学し、教育学と心理学を履修する一方で、後にお雇外国人として日本に招聘される、音楽教育家・メーソンに師事して唱歌を学んだ。

18 例えば、手代木、前掲書、174-197頁。中村、前掲書『洋楽導入者の軌跡』483頁。

19 中村、同前、403頁。

20 手代木俊一「19世紀アメリカの宣教と音楽」『国際基督教大学学報 キリスト教と文化』第30号、1999年、97頁。

21 朝日新聞文化欄「唱歌に隠された讃美歌」(1993年7月24日夕刊)、NHKテレビ番組「今夜はあなたとミステリー 唱歌誕生の謎」(1995年6月2日)、安田、前掲書『唱歌と十字架』。

22 Music in Japan, *Dwight Journal of Music*, August 14, 1880, p.135.

[手代木、前掲書「19世紀アメリカの宣教と音楽」97-98頁より再引用]

し、そのことをわれわれに示している。」(手代木俊一訳)(下線筆者)

ここでは、メーソンの日本での活動と基督教宣教との重要な関連について述べられている。メーソンは日本での音楽活動の中で、日本の5音で構成された音階を、西洋音楽の7音音階に合わせることを活動の中心にしていた。そして、そのように日本人を「音楽的な国民」に変えることが、彼の音楽教師としての仕事であるとともに、彼の宣教活動であった。つまり、メーソンにとって、異教徒である日本人の耳(聴覚)を合理的な西洋の音階<sup>23</sup>に合うよう標準化することは、日本人の魂に基督教の神を植えつけるといった宣教活動でもあったのである。

メーソンの日本における主な活動の一つは、日本初の小学生用の音楽教科書である『小學唱歌集』(音楽取調掛編、1881年～1884年、全3篇、91曲)の編纂であった<sup>24</sup>。伊沢修二は、メーソンとともに選曲委員に選ばれ、両氏は音楽選択の作業に共同であつた。『小學唱歌集』の特徴は、西洋的な楽曲の占める割合が極めて高いことである。91曲のうち西洋音階に基づく楽曲は83曲もあり、9割以上を占める<sup>25</sup>。また、その洋楽のなかでも、長調(major key)が圧倒的に多く、短調(minor key)は一割にも満たない<sup>26</sup>。これは、後に触れる『音楽取調成績申方要略<sup>27</sup>』で伊沢が示した、短調は軟弱・憂鬱で不健康であるとする音楽観が反映されたものであろう。1881年に発刊された『小學唱歌集初編』(全33曲)の選曲の多くはメーソンによるものだが、そのうち10曲の出所が讃美歌であることが近年の研究<sup>28</sup>で明らかにされた。33曲のうち、12曲は歌うための準備をする単純な旋律にのせた音階練習曲で、4曲は日本人が作曲したものであった<sup>29</sup>。つまり、それらを除いた17曲が西洋音楽で、そのうちの10曲が讃美歌であったということになる<sup>30</sup>。このメーソンの讃美歌の選曲は、彼のバックグラウンドを物語るものともいえるだろう。

メーソンの日本での活動を全体的に見渡すと、彼こそまさにトゥルジェーの理想とした宣教を具現化した人物であったのではないかと思われるのである。

以上のように、お雇い外国人メーソンの日本での活動<sup>31</sup>・業績について検討することによって、

23 ここでいう西洋の音階とは、平均律を基本とした音階のことをさす。明治政府は、メーソンが洋楽を導入する際に、平均律を西洋の標準的な音律として採用した。平均律は、ピタゴラス音律にはじまる西洋音律の長い歴史のなかでは比較的新しいもので、19世紀半ばにおけるピアノの大量生産にともなって、その調律のための標準的な音律として取り入れられたことが契機となり中心的になった音律のことである。つまり、平均律が必要とされたのは、音楽的な要請というよりも、楽器の生産という産業の要請からのほうが強かった。平均律は、さまざまな音律が並存する状況、つまり音の調律法をめぐる複雑な状況を解決するひとつの手段として登場した。1オクターブを人為的に十二の均等な音程で分割することによって生み出される平均律は、微妙な音程の差を完全に消滅させた上で成り立っている。音楽の近代化・合理化の流れのなかで、平均律の音響的な欠陥に対する批判的意見は、今日でも少数派にとどまっているが、ハリー・パーチやラ・モンテ・ヤング(ともにアメリカの実験作曲家)などの作品に象徴されるように、近代西洋音楽とは異なる、新たな音律の理論化や実践を試みる作曲家たちが活躍するような音楽シーンも誕生している。[藤枝守『増補 響きの考古学』(平凡社、2007年)を参照]

24 1895年に東京音楽学校(1879年設立の音楽取調掛がその前身)がメーソン叙勲のために作成した「功績調査書」では、『小學唱歌集』全三篇がメーソンの業績とされているが、中村理平(『洋楽導入者の軌跡』、522頁)は、第三編については、メーソンの著作から引用されたものもあるが、重音唱歌の登場をはじめ、主にメーソンの後継者のフランツ・エッケルトの仕事であると考えたほうが正しいと指摘している。

25 杉田政夫『学校音楽教育とヘルバルト主義』風間書房、2005年、28頁。

26 江戸時代の都会で発達した音楽に特徴的な都節音階は、西洋音楽という短調と類似した音階を用いていた。

27『小學唱歌集』編纂中に、音楽取調掛で着手された「国歌創成」のための研究調査の結果を纏めた報告書。

28 安田、前掲書『唱歌と十字架』『日韓唱歌の源流』。手代木、前掲書『讃美歌・聖歌と日本の近代』。

29 安田、前掲書『唱歌と十字架』135頁。

30 安田、前掲書『日韓唱歌の源流』84頁。

31 メーソンは、1880年3月に文部省のお雇い外国人として来日し、1882年7月に離日する。

日本唱歌と讃美歌との密接なつながりが浮き彫りにされた。日本唱歌は、メーソンが従事した日本への西洋音楽システムの導入とともに生まれた、音楽の近代化の産物であった。近代西洋音楽が聖歌・讃美歌から生まれたという歴史的事実に鑑みると、西洋音楽による日本音楽の近代化とは、音楽のキリスト教化を意味したということもできるだろう。

### 3. 音楽取調掛と「国歌創成」

#### 3-1. 学校唱歌と「国歌」

では次に、当時文部省派遣研修生であった伊沢修二と留学生監督官の目賀田種太郎が連名で文部大輔・田中不二麿に宛てた上申書「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ<sup>32</sup>」(1878年4月8日)についてみてみよう。これは、その後、唱歌教育の創設が本格化に向けて動き出す契機となったもので、文部省の唱歌教育政策の傾向をみる上で重要な内容が含まれている。上申書は冒頭で、欧米の学校では唱歌が普通教育の一科目であるという事実をあげ、その理由について以下のように述べる。

「音楽ハ学童神氣ヲ爽快ニシテ其ノ勤学ノ勞ヲ消シ肺臟ヲ強クシテ其ノ健全ヲ助ケ音声ヲ清クシ発音ヲ正シ聴力ヲ疾クシ考思ヲ密ニシ又能ク心情ヲ楽マシメ其ノ善性ヲ感發セシム是レ其ノ学室ニ於ケル直接ノ功力ナリ然シテ社会ニ善良ナル娛樂ヲ与ヘ自然ニ善ヲ遷シ罪ニ遠カラシメ社会ヲシテ礼文ノ域ニ進マシメ国民揚揚トシテ王徳ヲ頌シ太平ヲ楽ムモノハ其ノ社会ニ対スル間接ノ功力ナリ」

つまり、欧米の学童は、学校における音楽教育を通して、勤勉からの疲労を癒し、「肺臟ヲ強ク」するなど健康を増進させ、「音声」や「発音」など聴力に関わる身体的機能を高めることによって思考能力を強化し、さらに、心情が善良になることも期待できるとし、まず音楽の個人に与える直接的な効用について述べる。ここでは、生徒の自発性を重視したフレーベル主義<sup>33</sup>の影響がみられる。

だが、問題は、教育によってそのような善良な個人を育成することが、「国民」を「揚揚」とした気持ちにさせ、終には、その個々人の全体的な効果が「社会ニ対スル間接ノ功力」となると唱えているところにある。伊沢らは、こうした欧米の例を引き合いに出しつつも、結局は教育を国家的な枠組みにはめ込んでしまう。つまり、伊沢らにとって、個人の教育は国家の利益と不可分の関係にあり、したがって音楽教育も国家に利するものでなければならなかった。国家主義的な教育観がみられるとはいえ、まだここでは生徒の自発性がまがりなりにも前提にあるだけ、後年の皇国主義的国家主義のそれとは体系的に異なるものである。ただ、今後の唱歌教育の方向性を規定するほどの権限があった音楽取調事業が、当初から教育政策を国家の枠組みのなかで考えていたことは、当時の日本の限界を早くも物語っているといえよう。

つぎに、伊沢らは日本の音楽文化について述べている。すなわち、日本の音楽は、「雅俗ノ別」があって国民全員が歌えるような統一した音楽がなく、唱歌教育の実施は未だ時期尚早であるとの認識をもっている。かといって、伊沢らは、「西洋ノ楽」をそのままの形で取り入れることに

32 目賀田種太郎・伊沢修二『学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊沢修二ノ見込書』(明治11年4月8日)『東京芸術大学百年史 東京音楽学校編』第一巻、音楽之友社、1987、14頁。

33 世界で初めて幼稚園を設立したドイツの教育家・フレーベル(Frobel, 1782-1852)によって編み出された幼児教育思想のことをいう。子供の自発的活動と創造性を伸ばす教育をめざした。



は否定的であり、「彼我和合シ一種ノ楽ヲ興サバ我公学ニ唱歌ノ課モ追々相立候様相可成リト存候」と論を結ぶ。つまり、この上申書で伊沢らが主張したかったのは、西洋音楽と日本音楽を「和合」することによって新しい音楽を創出していけば、唱歌教育の創設も漸次進展するであろう、そのためにはその「国楽創成」の準備をする音楽取調に取り掛からなければならないと結んでいる。要するに、伊沢・目賀田が唱えた「国楽創成」とは、国家の成長を支える「国民」を形成することを第一の目的として学校唱歌教育を創設し、その事業を通して日本音楽を西洋化することであった。

### 3-2. 東西の音律

次にみる資料は、1879（明治 12）年文部省内に設置された音楽取調掛で行なわれた、「国楽創成」のための研究調査の一つである「内外音律ノ異同研究ノ事<sup>34</sup>」である。以下、その研究結果を検討していくことにする。

音楽取調掛が国楽を造るためにまず明確にする必要があると考えたのは、日本と西洋の間に音律の違いがあるかどうかであった。そこで、その判定を、音楽教師メーソンと箏曲家山勢松韻、雅楽家の三名がすることになった。箏曲家山勢松韻の場合は、『『ピアノ』ノ音ヲ知リタル時ヨリ其律ト箏ノ調子ヲハ毫モ異ナル所ナシ』とし、「雅楽家ノ諸氏」は、「我十二律ハ『ピアノ』ノ十二音（全音七半音五ヲ合シテ云フ）ニ殆ド相同ジ」と、日本の伝統音楽の専門家も音律上の差異は認められないと判定した。以上の結果から、「我音律ト西洋ノ音律トハ毫モ異ナル所ナシト論決シテ可ナリ」とまとめている。ここで『『ピアノ』ノ十二音（全音七半音五ヲ合シテ云フ）」（下線筆者）が西洋の標準的音律とみなされていることは、明治期に導入された音律が平均律であったことを証している。藤枝によると、この頃は、西欧において平均律が普及していく時期であり、平均律に対して批判的な声があがるのも少なくなかったのにもかかわらず、日本では平均律以前の音律の存在は十分に知らされぬまま、平均律だけが西欧での歴史的な音律の流れから切り離されて紹介された<sup>35</sup>。

音楽取調掛は、メーソンに対して、「本邦在来ノ諸種ノ音楽」を「審聴」させ、「其音律ノ西律ニ異ル所アリヤ、又其声曲ノ正理ニ適スルヤ否ヤヲ訊問」したところ、「本邦音楽ニ熟スル所ノ諸家奏スル所ハ僅カモ毫モ西律ニ異ナル事ナシ」として、音律上の違いはないと判定した。一方、「其旋律ノ法ニ於テハ少ク異ナル所アリト云ヒシガ今日ニ至リテハ愈々其真ニ然ルヲ信ジテ毫モ疑フ所アルヲ見ズ」とし、旋律上でははっきりと違いが認められるとした。

旋律とは、「コトバとそのつながりの文章とのもっている力を最上の条件で発揮させようという場合に<sup>36</sup>」用いられるものであるとするなら、異なる言語を用いる邦楽と洋楽とでは旋律の面で違いがでてくるのが当然である。ただ、音律については、今日の民族音楽学、比較音楽学の研究では、日本の伝統音楽と西洋音楽の音律には違いがあることが一般的な説となっている<sup>37</sup>。すでに述べたように、平均律という 1 オクターブを 12 等分にして、微妙な音程の差をすべて均質化・画一化するという合理的な音楽システムを構築したのは西洋音楽であった。つまり、ここで

34 音楽取調掛『音楽取調成績申方要略』文部省、1884 年、295-301 頁。

35 藤枝守『増補 響きの考古学』平凡社、2007 年、204 頁。

36 『新音楽辞典 楽語』音楽之友社、1977 年、321 頁。

37 小方厚『音律と音階の科学』講談社、2007 年、157-161 頁。

メーソンは、邦楽の響きのなかにある正確に数値化できない部分は、平均律を採用することによって合理化された結果、無いものとみなしているにすぎない。

メーソンは、先にみた *Dwight Journal of Music* に掲載された “Music in Japan” のなかで、「異教徒である日本人は、我々から言わせれば、音楽について何も知らなかったのです。彼らの音階は5音で構成されており、日本人の耳を、実際の音楽の基本となる完全な音階に合うように、現実問題として調整していかなければならなかったのである<sup>38</sup>」と述べている。要するに、東西の音律・音階についてのメーソンの意見は、母国の雑誌でのインタビューと日本で表明した意見との間で相違が認められる。このことから少なくともいえるのは、メーソンは、西洋と東洋の音階・音律には違いがあることを認識しつつも、日本人の音感覚を西洋音楽的に均質化していこうという意志を貫くために、それについてあえて言及を避けたのではないかということである。

### 3-3. 教育としての音楽

次にみる資料は、伊沢が「音楽取調成績申方要略」で「音楽ト教育トノ関係<sup>39</sup>」について述べたものである。ここでは、そのなかでも、伊沢が長短ニ音階の得失利害および音楽と「道德上ノ関係」について記したところに注目してみていく。まず冒頭で、「音楽の人心に感動する影響の大なる所以はまた更に喋々するを要せざるものの如し」とし、長音階<sup>40</sup> (major scale) の利点と短音階<sup>41</sup> (minor scale) の欠点が以下のように述べられる。

長音階ノ旋法ニ属スル楽曲ハ勇壯活潑ニシテ其ノ快情実ニ極リナシ。之ニ反シテ短音階ノ旋法ニ属スルモノハ柔弱憂鬱ニシテ哀情ノ甚ダシキモノトス。故ニ長音階ノ楽曲ヲ演ズル者ハ心性ノ淵底ヨリ歓楽ヲ覚エ其快情発シテ容貌ニ顯ハレ之ヲ見聞スルモノトイエドモ知ラズ識ラズ亦其快楽ヲ享クルニ至ル。而ルニ短音階ノ楽曲ヲ演ズル者ハ哀情計ラズ悲嘆ノ感ヲ催フシ其外貌ニ露ハル、ヤ覆ハントスルモ得ベカラザルニ至ル。是ヲ以テ幼時長音階ニ由テ薰陶ヲ受ケシ者ハヨク勇壯活潑ノ精神ヲ發育シ有徳健全ナル心身ヲ長養スルヲ得。(中略)「欧米ノ各国其唱歌ヲ学校教科ニ充ツルヤ皆此長音階ヲ採テ短音階ヲ棄ツ」(中略)短音階ハ古代ノモノニシテ楽曲ニテハ益々古製ノモノニ属セリ。故ニ長音階ノ楽曲ハ文教最進ノ国ニ多ク短音階ハ其末進ノ国ニ多シ。(下線筆者)

長音階の旋律による楽曲は「勇壯活潑」にして気分をすっきりさせ、短音階の旋律による楽曲は「柔弱憂鬱」で悲しくさせるとし、その後も長音階の長所と短音階の短所について同様の調子でのべられる。まず、「欧米ノ各国其唱歌ヲ学校教科ニ充ツルヤ皆此長音階ヲ採テ短音階ヲ棄ツ」と、欧米の学校では唱歌が一教科となっており、全ての学校で長音階の曲を取り入れ、短音階の楽曲は使用しないと述べ、短音階は、「古代のもの」で、楽曲は「古製」のものだから、「長音階製の楽曲は文教最進の国に多く短音階は其末進の国に多し」とし、国家の文明化の程度を価値基準として、文明国は長音階の楽曲が多く、後進国は短音階の楽曲が多いので、「教育上ニ用フベキ楽曲ハ長音階ニ帰スルヲ知ルベシ」とする。ここには、音楽を文化的な視点からではなく、もっ

38 Music in Japan, *Dwight Journal of Music*, August 14, 1880, p.135.

[手代木俊一「19世紀アメリカの宣教と音楽」『国際基督教大学学報 キリスト教と文化』第30号(1999年)、97-98頁より再引用]

39 前掲書『音楽取調成績申方要略』143-156頁。

40 長調の曲を作るために用いられる音階。

41 短調の曲を作るために用いられる音階。

ばら「文明の利器」として見る伊沢の政治的に偏った音楽観が現れている。

次に、音楽と「道徳上ノ関係」については、「音楽ハ人生ノ自然ニ基キ其心情ヲ感動激触スルモノニシテ喜悅ノ歌曲ハ人心ヲ喜バシメ悲哀ノ歌曲ハ人心ヲ悲嘆セシムル等ノ如ク一モ心情ノ感動ヲ生ゼザルモノナシ」とし、音楽が、喜びや悲しみ、感動など心情面に大きな影響を及ぼすということが示される。「道徳上ノ歌曲ハ深く人心ヲ感動セシムル」とし、道徳に関連した歌曲は人心を感動させるといい、続いて、「尊王愛国ノ赤心義氣ヲ煥発セシムルモノニハ『君ガ代』『皇御国』等ノ如ク、敬神ノ心ヲ起サシムルモノニハ『栄ユク御代』ノ如キ是ナリ」として、道徳的な歌曲を通して国民の忠君愛国の士気を養うことが教育の任務であると考えている。その後の日本唱歌の歩みは徳育の偏重をきたしたが、ここにすでに前触れがあったといえることができるだろう。

以上のように、音楽取調掛の報告書のなかで、音楽文化のもつ独自性や歴史性を無視した意見が平然と述べられていたのは、そもそも音楽事業創設の動機が、欧米並みの国家を形成するための手段としての「国楽創成」というところにあったからではないだろうか。ここで問題なのは、日本の音楽教育の中心となる音楽取調掛の創設の目的が、個人の身体的・精神的成長を促進するための音楽教育の実施にあったのではなく、国家の成長・発展に即した音楽教育の推進にあったところである。まとめると、音楽の近代化に向けて音楽取調掛が着手した「国楽創成」という国家事業は、日本音楽の独自性や日本「国民」の民族性を音楽的に表現するために行われたものではなく、西洋諸国に劣らない近代国民国家の形成を目的として実施されたものであった。

## II. 韓国音楽の近代化

### 1. 韓国音楽の近代化と西洋音楽

韓国の西洋音楽史は、まさにキリスト教の韓国伝来とともに始まった<sup>42</sup>。キリスト教の讃美歌を通して、西洋音楽の声楽、器楽の様式が初めて韓国に伝えられたのである。こうして舶来した讃美歌は、やがて、主にキリスト教系私立学校や民族系私立学校の学生の間に広まり、その旋律に自国の言葉をのせた韓国唱歌（チャンガ<sup>43</sup>）を生み出し、韓国音楽文化の近代化における直接的な媒介体として大きな役割を果たすことになった。

周知の通り、キリスト教は、近代韓国教育史において大きな位置を占め、近代教育の先駆的な役割を果たしてきた。19世紀末の韓国におけるキリスト教宣教師の存在は、韓国近代化の触媒となったという意味で、画期的な意義をもつものであった。この時期の韓国では、政府による教育改革が不振の状態にあったので、キリスト教系私立学校は、自主独立に向けて近代教育を切望していた民衆の教育熱を優位に収束することができたのであった。

梨花学堂は、1886年5月監理教派遣宣教師のスクラントン夫人（Mrs. Mary Scranton, 1834-1909）によって設立されたキリスト教系私立学校で、韓国初の近代女子教育機関として知られている。スクラントン夫人が梨花学堂で学生たちに英語の讃美歌を教えたのが、西洋音楽の始まりであったとされる<sup>44</sup>。梨花学堂の1904年度音楽科カリキュラムには、唱歌と奏楽に加えて、楽

42 李有善・李相萬「現代音楽」『韓国音楽史』大韓民国芸術院、1895年、479頁。

43 「チャンガ」とは、日本語の唱歌をそのまま借用したものだが、韓国では日本における学校唱歌の概念を超えて、愛国歌などを含んだより広範な意味内容をもっている。

44 M. E. Young, "What the King Did not Know", *Korea Mission Field*, April, 1938, p.69.

器用法が含まれており<sup>45</sup>、このことから、梨花学堂ではすでにこの頃から比較的充実した音楽教育を行っていたことが窺える。1910年梨花学堂に大学部が設置されるにおよび、本格的な西洋音楽の高等教育がなされるようになった<sup>46</sup>。

梨花学堂で最初に歌われた讃美歌は、日本と同様に「エス我を愛す」(原歌詞初行《Jesus loves me, this I know》)であった。このことは、日韓両国が19世紀末に西洋音楽に接触した際に、類似した西洋音楽体験をしていたことを示しているといえよう。これはまた、讃美歌がいかに強い伝播力と繁殖力をもっていたのかを示すものでもある。

梨花学堂の設立と同年に、監理教の宣教師、アッペンゼラー(H. G. Appenzeller, 1858-1902)によって培材学堂が創立された。培材学堂で最初に音楽を教えたのは、設立者のアッペンゼラー自身であったが、その後、アメリカ人宣教師、バンカー(D. A. Bunker)が音楽を受けもった<sup>47</sup>。注目されるのは、1896年11月21日、韓国の自主独立を象徴する独立門<sup>48</sup>の定礎式が行なわれた際に歌われたのが、バンカーによって作曲された愛国唱歌であったということである<sup>49</sup>。作曲といっても、スコットランド民謡の《Auld Lang Syne<sup>50</sup>》の旋律を借用して作られた<sup>51</sup>、いわゆる「替え歌」であった。作詞は未詳とされるが、尹致昊や安昌浩など独立運動家の名前が数名挙げられている<sup>52</sup>。その歌詞は、現在の韓国の国歌の母体である<sup>53</sup>。

尹致昊は、クリスチャンの開化的知識人であり、自らが編纂した『讃美歌』(1908)を出版するなど、近代韓国音楽史上、重要な役割を果たした人物である。この第14章に収録された《Patriotic Hymn》も《Auld Lang Syne》の旋律を借用した愛国歌であった。その歌詞は、前記の愛国歌の一部が改変され、現在の国歌の歌詞とほぼ同じである<sup>54</sup>。

以上みたように、西洋歌曲の旋律を借用して自国語の歌詞を付けるという音楽の近代化・西洋化の過程は、日韓両国に共通してみられた現象であった。当時は現在のように著作権問題が発生しなかったため、自由自在に讃美歌や西欧歌曲の旋律を使い、世界規模で「替え歌」が量産されていたことが推察される。つまり、遠く離れた異国の地に暮らす、人種や文化を異にする人たちが、メロディー(旋律)という互換性に富んだ音組織を通じて、共通の「音楽の近代化」体験をしていたことが窺えるのである。

## 2. 民族系私立学校と唱歌教育

### 2-1. 民族系私立学校の勃興とその歴史的背景

韓国における最初の近代改革であった甲午改革が中途挫折し、そのことは、民衆の教育熱をいっそうミッション・スクールへ集中させることになった。日露戦争後、日本の帝国主義的侵略の意図がいっそう現実味を帯びていくなかで、民衆の近代化への要求とそれに付随した教育熱は更な

45 『梨花百年史』72頁。

46 韓国基督教歴史研究所、前掲書、278頁。

47 同前、174頁。

48 独立協会の会長、徐載弼が建立の発議をし、1897年に完成した。

49 高、前掲書、20頁。

50 日本では『蛍の光』に《Auld Lang Syne》の旋律が借用された。

51 朴成泰「韓国近代音楽教育史における『愛国唱歌教育運動』の意義」『音楽教育学』第24-2号、1994年、39頁。

52 安田、前掲書、『日韓唱歌の源流』178頁。

53 閔庚燦(山内文登訳)「韓国の国歌と韓国における〈君が代〉」『季刊 エクスムジカ』第4号、2001年、137頁。

54 閔、同前。

る高まりをみせていくことになった。そうした教育エネルギーの有力な受け手となったのが、民族系私立学校であった。私立学校は保護条約期に加速度的に増加し、1911年の総督府統計によると、普通学校の全体における学校数の割合が12%だったのに対し、キリスト教系学校を含めた私立各種学校は88%を占めていた<sup>55</sup>。この数字は、韓国民衆が、日本の帝国主義的膨張に対する抵抗への強烈な意志をどれほど強くもっていたのかを如実に示すものであろう。近代教育の必要性が、国運が傾いていくとともに、韓国民衆のなかに深く認識され、同時に民族意識や愛国心が形成されていくのであった。

一方、そうした愛国心とともにいわば必然的に芽生えてきたのが、強烈な反日感情であった。日本側は、当然のことながらこうした事態を「教育上頗る憂慮すべきもの<sup>56</sup>」と認識した。なぜなら、日本側にとってこうした愛国主義的な私立学校は、「名を學校に藉るも其の實無く、徒らに青年子弟を集めて遊戯訓練を事とし、政治と教育とを混同して不良なる教科書を使用し不穩の思想を注入し以て學生生徒の前途を誤らしむるもの<sup>57</sup>」にほかならなかったからである。

もっとも、私立学校が数の上では圧倒的な位置を占めていたとはいえ、そのなかには設備や資金、教育内容や人材の面で低い水準にあるものも少なくなかった。しかしながら、揺るぎない崇高な建学の精神に支えられた独立運動家の運営する私立学校は、比較的整った施設や設備をもち、近代知識や啓蒙思想をカリキュラムに組み入れ、さらに愛国主義的な教育によって民族意識の統合を促し、民衆の期待と願いに応えていった。ここでは、代表的な独立運動家、安昌浩によって設立された大成学校に焦点をあて、唱歌を中心にその教育内容について概観していくことにする。

## 2-2. 大成学校の唱歌教育

大成学校は、1908年9月、安昌浩が尹致昊、李鍾浩らとともに平壤に設立した中等教育機関である。設備、教科、教員が比較的良好に備わった当時の代表的な私立学校であった。安昌浩は、長老系のアメリカ人宣教師、アンダーウッド創立の救世学堂<sup>58</sup>に学び、1895年に17歳で入信した<sup>59</sup>。その後、アッペンゼラーの私塾（培材学堂の母体）に学び、その後、教育学を本格的に学ぶために渡米した<sup>60</sup>。

大成学校では、国語、歴史、理化学、商業、法制などの近代教科とともに、唱歌と体操が重視された<sup>61</sup>。それは、その教育方針・目的が、「健全な人格をもった愛国心のある国民の養成<sup>62</sup>」、すなわち祖国存亡を救う民族運動の闘士の育成にあったからに他ならない。つまり、国権回復の実現には、近代知識・啓蒙思想に裏付けられた世界的な視野が必要であると同時に、唱歌と体育によって強靱な身体と熱烈な愛国精神を養成し、民族のためにいつでも闘えるような人材が求められていたのである。そして、こうした精神教育は、安自らが担当したのであった。

ここで重要なのは、安の精神教育のなかで唱歌が大きな位置を占めていたことである。大成学

55 朝鮮総督府『統計年報』1911年。

56 高橋濱吉『朝鮮教育史考』（昭和2年6月）299頁。

57 同前。

58 孤児院に併設された、孤児教育を専門とした学校。その後、徹新学校に改名し、現在も延世大学校として存続している。

59 尹健次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会、1982年、229頁。

60 韓基彦『韓国教育史』広池学園出版部、1965年、319頁。

61 金泰勲『近代日韓教育関係史研究序説』雄山閣出版、1996年、138頁。

62 同前、188頁。

校では生徒に毎朝の朝会で愛国歌を歌わせるなど<sup>63</sup>、唱歌の教育的価値が非常に高く認められていたのであった。安は、愛国心の涵養を目的として道徳や倫理などを教授するなかで、音楽が重要な媒介体となることを十分認識していたのであろう。安は、音楽には人格・品性を陶冶する力があると信じ、多くの愛国歌を残している<sup>64</sup>。

ところが、1909年3月、学部は、大成学校を筆頭に、愛国主義的教育を行なっている私立学校に対して、「愛国」という言葉の使用を禁止した<sup>65</sup>。その後も、愛国啓蒙運動の総本山とみなされた大成学校に対する学部と統監府の監視は、弱まることはなかった。

そうしたなかで、1909年10月、統監伊藤博文がハルビンで安重根によって暗殺される事件が起こった。統監府は、彼らにとって「犯人」と思しき有力な民族主義者たちを一斉に検挙しはじめるのだが、そのなかに、統監府が以前から目の敵にしていた安昌浩が含まれていたことは想像に難くないだろう。安は4ヵ月後に釈放されたものの、安に対する統監府の取り締まりも一段と過酷さを増してゆき、ついに彼は上海に亡命を余儀なくされた。

ところで、ニム・ウェールズ著『アリランの歌』のなかでキム・サンは、大きな人格的感化を受けた人物として安昌浩をあげ、彼の音楽嗜好について次のような感懐を述べている。

「安はアメリカで歌や物語をたくさん覚えたが、とくに黒人霊歌が好きで、私にいくつか教えてくれた。上海では彼のところに集まって『オールド＝ブラック＝ジョー』や

『マイ＝オールド＝ケンタッキー＝ホーム』『主人は冷たい土の中に』を歌ったものだ。朝鮮の彼の学校でもこれらの歌を教え、月のよい夜などによく歌われた。朝鮮人は懐郷、不幸、死者への想いなどに捧げる哀調こめた曲を愛するから、黒人のメロディーはたいへんうけた。私もこういう古い歌が好きだった<sup>66</sup>。」

ここでキムが、朝鮮人は黒人の好む旋律（メロディー）に何か心の琴線に触れるものがあると感じているのは、非常に興味深い。黒人霊歌とは、まさに黒人の苦難の歴史を背景として生まれたものである。朝鮮人が懐郷や不幸・死などに捧げる曲を好むというのも、彼ら/彼女らの歴史的・文化的背景と無関係ではあるまい。ここで少なくとも言えるのは、民族の背負った歴史はその民族の音楽的感性の涵養に少なからぬ関与をしているということである。

ところで、このように民族の音楽的感性を捉えようとすると、前に示した明治日本エリートたちの音楽観がいかに特殊で、政治的意図に満ちたものであったかが窺われるといえないだろうか。つまり、私がここで言いたいのは、哀調的な音楽を好む民族は弱い、あるいは「劣等」とであるとか、「勇壮活発せしむる」長調の歌を好む国民こそ文明国の国民だとかいった進化論的言説が、日本における西洋音楽の導入期にいかにも正当な意見として語られてきた、その特殊な状況に注意を向ける必要があるのではないかということである。ここで強調したいのは、そのように国家の強制のもとで形成された音楽観は、直接的経験によって得られた音楽観とは区別して考える必要があるということである。学校音楽教育を通して、一つの民族を一定の方向に鑄造し直し、国

63 朱耀翰『安昌浩全集』三申堂、1963年、89頁。

64 李光洙（貝末謨訳）『至誠、天を動かす』現代書林、1991年、191頁。

65 『大韓毎日申報』（1909年3月13日・14日付）

66 ニム・ウェールズ、キム・サン（松平いを子訳）『アリランの歌』岩波書店、1987年、122頁。

民を創出するという行為は、人間の多様性や民族の感性を押しつぶすような強硬的なものであり、人間のあり方をも強制的に変容させるように仕向ける象徴的暴力にほかならない。

次節では、こうした国家による精神的暴力の行使を象徴する一事例である、日本の植民地唱歌教育についてみていこう。

### Ⅲ. 日本の植民地唱歌教育と「愛国唱歌」

#### 1. 日本唱歌教育制度の移入とその実際

1905年に韓国は日本の「保護国」となり、以後、日本は政治、経済、行政、教育など広範にわたるさまざまな制度改革を実施していくことになった。唱歌は、1906年に公布された「普通学校令施行規則」において教科目の一つとして定められた。唱歌が公教育において正式な科目となったのは、韓国ではこれが初めてのことであった。

朝鮮における教育制度は、内地のそれに準拠することが基本方針とされた。この時期の日本では、伊沢修二主導のもとで唱歌教育制度がすでに確立されていた。そのことは、いわば必然的に朝鮮の唱歌教育に日本の国家主義的な唱歌教育の排他的な性格がそのまま移入されることを意味したのであった。

音楽取調掛出身の小出雷吉は、朝鮮唱歌教育の形成に貢献した人物として知られるが、彼を漢城師範学校の音楽担当者として任命したのが伊沢修二であったことは、近代日韓（朝）の唱歌教育の間にいかに密接な関連があったのかを示すものであろう。

保護条約期には、当時日本で使用されていた『尋常小学唱歌<sup>67</sup>』が官公立学校で暫定的に使用されることになり、それは1910年、韓国初の唱歌教科書である学部編纂『普通教育唱歌集 第一輯』が発刊されるまで続いた。この『尋常小学唱歌』を編纂した田村虎蔵<sup>68</sup>は、小出雷吉が鳥取県尋常小学校の教諭をしていたときの生徒であり、つまり二人は師弟関係にあった。東京音楽学校では、二人は専修部に所属する同僚であった。ここから少なくともいえることは、こうした日本における唱歌教育の人的ネットワークは、1905年の保護条約以後、そのまま朝鮮に輪を広げてその活動を展開していったということである。

さて、韓国初の『普通教育唱歌集 第一輯』は、田村虎蔵が編纂した『尋常小学唱歌』を範として作られたものであるが、田村は、併合後の唱歌教育について次のような意見を述べている。

「新版図朝鮮国民を我日本帝国々民に同化せしめんには、素より多種多様の方法あらん。而も大和言葉を附したる新旋律をして、彼の一千二百萬人に謡歌せしむることは、所謂日本人としての人心統一に資し、新国民を同和せしむ上に於て、吾人は最も有力なる手段の一なりと信ず<sup>69</sup>。」

つまり、田村は、「大和言葉」、すなわち易しい日本語口語体で書かれた唱歌が、朝鮮人の日本同化の利器となるだろうと考えていた。こうした見解がでるのも、田村が明治30年代に隆盛し

67 佐々木吉三郎、納所弁次郎、田村虎蔵共編による各学年3冊ずつ計12冊からなる唱歌集。

68 近代日本の唱歌教育に携わり、わが国の音楽教材史上に大きな足跡を残した。ヘルバルト教育学の継承者として位置づけられ、ヘルバルト主義が反映された『教科適用幼年唱歌』『唱歌科教授法』など多くの唱歌教材の著者として知られている。また、軍歌風の唱歌や言文一致唱歌の作曲家としての顔ももっていた。

69 田村虎蔵「韓国併合と音楽教育問題」『音楽界』1911年1月号、12頁。

た言文一致運動における中心的な論者であったことと関連があるだろう。言文一致の制度的な推進に大きな影響力をもった「言文一致会」は、貴衆両院に提出した「言文一致の実行に就いての請願」の冒頭で、「凡そ国語の独立普及発達は国家の統一を固くして国勢の伸張を助け国運の進歩を速やかにする第一の方法であってそれには言語（話しことば）と文章を一致させねばならぬことゝ信じます<sup>70</sup>」と述べている。つまり、言文一致会の活動の目的は、「国家の統一」のための「国語」、つまり標準語を推進することと、「国勢の伸張を助け国運を速やかにする」方法として植民地言語政策を構想することにあった。これは、日清戦争後の国家意識の発揚と一致した動きであったことは論をまたない。

尹健次は、日本の朝鮮教育政策において常に重要な役割を果たしたのは日本語であったとし、その理由を、英語と聖書を教育の主たる内容としたキリスト教系学校に対して、伝播すべき有力な宗教をもたない日本は対抗策として日本語を教育の基礎においたことに求めている<sup>71</sup>。この点からも、日本語と大きな連絡をもつ唱歌教育は、朝鮮の人々に日本語を普及するための格好の道具・手段となったことが伺える。

『尋常小学唱歌』は言文一致体で書かれた徳育唱歌、軍歌を中心とした唱歌集で、1905年から1910年まで使用された。併合直前の1910年5月、韓国の学部は『普通教育唱歌集』を発刊し、1914年、朝鮮総督府が『新編唱歌集』を刊行するまで使用された。これら全ての唱歌集に共通するのは、大和言葉の使用を通して日本情緒を教え込もうとの明確な目的をもち、主に言文一致体で書かれた徳育唱歌、軍歌によって構成された唱歌教科書であったという点である。関庚燦は、『尋常小学唱歌』を起点とする言文一致唱歌が、その後の韓国唱歌の発展に大きな影響を与え、戦後において日本音楽が禁止されたにもかかわらず、その残滓はいまだ根強くあることを指摘している<sup>72</sup>。

このように日本唱歌は、植民地教育を通して韓国の人々に強制されていくのであったが、それが日本の思惑通りに浸透していくことはなかった。ところが、日清戦争を契機に、日本の軍歌の旋律を用いた愛国唱歌・独立唱歌が思わぬ形で韓国民衆の間に流布するようになった。民衆が日本産の軍歌とは知らずに歌っていたとも考えられようが、それだけ多くの人に支持されたことにはそこには何か特別な理由があったと考えてよいだろう。安田寛によると、日清戦争前後から日露戦争にかけて韓国で歌われた軍歌に共通するのは、通称「ピョンコ節」とよばれる、府点八分音符と十六音符の組み合わせを繰り返すリズムである<sup>73</sup>。ピョンコ節は韓国の民謡のリズムに似ており、彼らが好む長短長短のリズムに簡単に変形することができたということもあって、韓国民衆はこれを熱狂的に支持するようになった。

こうしてみると、軍歌調唱歌は、公教育を通して普及されたのみならず、「戦争」という時代背景と重なることで草の根にも広まり、韓国唱歌に至大な影響を及ぼしていったといえるだろう。

70 「言文一致の実行に就いての請願」（明治34年2月）、言文一致会編纂『言文一致論集』東洋社、明治35年5月。

71 尹健次、前掲書、207-208頁。

72 関庚燦「韓国唱歌の形成過程における日本唱歌の影響について」松下鈞編『異文化交流と近代化——京都国際セミナー1996——』大空社、1998年、239頁。

73 安田、前掲書『日韓唱歌の源流』140-143頁。



## 2. 日本の「愛国唱歌」弾圧—保護条約期—

すでに述べたように、1905年保護条約締結以前の韓国の教育状況は、私立学校の急増という形で現れていた。それは、「独立協会」運動の高揚のなかで、開化思想が民衆のなかに浸透しはじめた1898年頃から、私立学校の設立がひとつの社会潮流となりはじめたことによっている<sup>74</sup>。朝鮮人の教育熱は、独立と伝道とで互いの利害が一致したアメリカ人宣教師の運営するキリスト教系私立学校に向かう方向と、愛国教育運動を推進して独立を確保していこうとする民族系私立学校への二つに収束していった。

そうしたなかで、愛国的・排日的な歌詞をつけた韓国唱歌は、上記の大成学校をはじめ多くの私立学校で盛んに歌われるようになった。韓国唱歌は、愛国啓蒙運動の一環となって、韓国民衆の思想啓蒙に重要な役割を果たしていくのであった。

統監府は、こうした愛国唱歌を「不穩唱歌」とみなし、いっそう取り締まりを強化していくことになった。1908年8月、学部は私立学校令発布後まもなく学部令第16号を公布し、「教科用図書検定規定」を制定した。音楽科に関しては『尋常小学唱歌』と『讚美歌』（ミッション・スクール用）の二冊だけを正式な教科書として認可し、以後、韓国唱歌の学校での使用は禁止された。つまり、これは、ミッション・スクールを除いた他の学校では、前述の田村虎蔵が編集した『尋常小学唱歌』が唯一の唱歌教科書となったことを意味した。「桃太郎」「一寸法師」「豊臣秀吉」「日本武尊」といった日本語の唱歌が、1910年学部編纂『普通教育唱歌集 第一輯』が発行されるまで使われることになった。

依学部次官は、憲兵隊長会議での演説において、「殊ニ唱歌ノ如キハ盛ンニ当今ノ政治時事ヲ非議セル挑発的不穩ノ歌詞ヲ教授スルモノ往々ニシテ之アルヲ聞ク<sup>75</sup>」と述べ、唱歌に対する取り締まりの強化を勧告した。この会議は教科用図書の検定認定制が導入されてから約2年をへた頃に開かれたのだが、このことは、韓国唱歌が、日本の厳しい弾圧にもかかわらず、韓国民衆に支持され続けていたことを示している。

すでに述べたように、愛国啓蒙運動の一環として、民族系私立学校で重視されていた教科は、愛国精神を鼓舞する唱歌および民族闘士を育成するための体操であった。学部は私立学校の愛国主義教育について次のように語っている。

「(中略) 此等私立学校ニシテ徒ラニ喇叭ヲ吹き鐘鼓ヲ鳴ラシ兵式訓練ヲ是レ事トシ学校ヲ以テ兵士ノ養成所タルノ觀ヲ呈セシメ (中略) 不良ノ圖書ヲ用ヒ不穩ノ歌詞ヲ唱ヘシムル等教育ノ本旨ニ背戾スル行動ヲ敢テシテ顧ミザルモノ、如キハ其必要ニ應シ數次訓戒ヲ加ヘタリ<sup>76</sup>」(下線筆者)

このように学部は、韓国統治における日本の利害と真っ向から対立する「不穩唱歌」と体操訓練をことさら警戒し、その民衆への影響を非常に恐れていたのであった。

もっとも、近代日本でも、唱歌教育と体育はその導入期からすでに愛国主義的色彩が強く、愛国精神を鼓舞する手段と化していた。つまり、この二つの教科は、国民統合の推進のために国家

74 尹健次、前掲書、237頁。

75 「韓国駐劄各道憲兵隊長(警務部長)会議席上 依学部次官演説要領」明治43年7月13日(『日本植民地教育政策史料集成(朝鮮編)』第66巻所収)、56-57頁。

76 學部「韓國教育ノ既往及び現在」(隆熙3年12月)『日本植民地教育政策史料集成(朝鮮編)』第63巻所収)、48頁。

に利用されたといった歴史的経緯をもつ。日本唱歌が奨励される一方で、旋律やリズムの面で類似した韓国唱歌が「危険」「不穩」「不良」とみなされたことは、両唱歌にのせられた歌詞がいかに政治性を帯びていたのかを物語っている。

「国民統合」という同質化・画一化への運動は、ある一つの秩序に国民全員の動きを合わせていくことである。近代日本唱歌は、まさにそうした秩序を実現するための「規律訓練」の役割を果たした。規律なしでは本来無秩序な状態にある人間は、有史以来、戦争や闘争を繰り返し、疫病、天災など危機的な状況に幾度も晒されながらも、同時に安定と安全への欲求を満たすために、人間の調和・共存への道も探ってきた。

もっとも、その「国民統合」が他民族を含む場合、マジョリティの民族にとっての安全・安定は、マイノリティの民族にとってはその逆の危険・不安定を意味することになり、同化の推進は国家的暴力の行使と同じことになる。禁止された韓国唱歌が、日本の弾圧にもかかわらず、朝鮮民衆に歌われ続けたということは、彼ら／彼女らが日本の唱歌教育による「国民統合」にいかにか強く反発・抵抗したのかを如実に示している。

### 3. 日本の「愛国唱歌」弾圧—植民地期—

愛国唱歌は、日本側の嚴重な取り締まりにも屈することなく、1910年の韓国「併合」以後も韓国人の間で盛んに歌われ続けた。

内部刑務局長・松井茂は「朝鮮の教育行政に就て<sup>77</sup>」と題する講演において、朝鮮における「教育警察」の必要性を唱える。「教育警察」とは、いかにも日本の韓国統治の特殊なあり方を物語るかのような名称であるが、松井は、「學校は神聖なもので、警察の干渉するところでないのは勿論であるが、朝鮮のやうな國柄では其必要が多いのである」と説く。「警察取締」が必要な具体的な対象を6つあげ、その内の一つは、「不穩の唱歌を歌うもの」であった。音楽教育に警察の取締りが入るということは、今日の音楽教育の現場からはとても想像がつかないような事態であるが、このような植民地下朝鮮の教育現場にこそ、まさに日本植民地主義の典型的なあり方が象徴されていたといえるのではないだろうか。

学部官僚の隈本繁吉は、1912年に実施された北韓地方のキリスト教系私立学校視察に関する報告書において、韓国の2大プロテスタント教会、監理派（メソジスト派）と長老派に属する学校の教育内容を以下のように述べている。

「基督教の教育事業は主として布教の方便に出づるを以て、両派設立の学校も其学科課程に就ては教育上首肯し難きもの少からず。固より同一派のものと雖も学校により趣を異にせりと雖も、概して学科目の大多数は宗教に属し、普通の知識に対する配当時間極めて少し。即ち小学校に在りては、祈祷・誡命・聖書・心工等教授時数の過半を占め、其余り以て普通の教科目に充つるも、特に唱歌と体操に費す所多し。而して唱歌の歌詞は讚美歌にあらずば愛国歌に属し、体操の「運動」なる科名を用いて喇叭太鼓によれる兵式訓練を行うなど韓人の意向に投じ若くは使噓する弊あり<sup>78</sup>。」（下線筆者）

愛国唱歌は、上述した大成学校などの民族系私立学校のみならず、宣教師が設立したキリスト

77 松井茂「朝鮮の教育行政に就て」『国民教育』第2巻第1号、1911年1月15日。

78 隈本繁吉「北韓地方ニ於ケル基督教学校視察復命」明治45年7月、28-29頁。（『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮編）』第67巻）

教系私立学校でも盛んに歌われていた。キリスト教系私立学校は、被抑圧民・朝鮮人に残された数少ない抵抗の意志を表出できる場であった。日本にしたら、キリスト教宣教師と独立運動が結びつくほど恐ろしいことはなかったであろう。なぜなら、独立運動は当然ながらそれ自体日本の統治に対する直接的な抵抗・反発を示すものであり、それが、国際世論や各国政府の意向に対して強大な影響力をもつ海外宣教師と手を結ぶようになったら、国際世論が一斉に日本統治批判に傾き、日本が一番避けたい撤退もやむをえないという状況が生まれる可能性があったからである。

もっとも、キリスト教系私立学校が、韓国人に抵抗の場を提供していたことは事実だとしても、その教育の欠陥を指摘する意見も少なくなかった。上記の隈本の報告にもあるように、メソジスト派と長老派に属する学校では、宗教関連教科以外では、民族系私立学校と同様に、唱歌と体操に多くの時間があてられていた一方で、当時の韓国民衆が求めていた——民族系私立学校では重視されていた——自然科学や一般教養などの近代学問をあまり教えていなかった。キリスト教系学校は、結局、その量的拡大にもかかわらず、質的には宗教教育に中心をおく段階から大きな発展を遂げることはなかった。キリスト教系私立学校は、韓国近代教育史上でしばしば語られる近代教育のパイオニアという高らかなイメージが強いだけに、ここにみられる教育観のギャップはそれだけ深淵な意味をもっているといえよう。

キリスト教系私立学校は、日本による圧制に苦しむ韓国民衆に抵抗の場を提供したという点で、抗日運動に大きな役割を果たしたといえるが、その教育内容が、真の独立に必要なとされる近代的・合理的・科学的知識を十分に満たしていなかったことが、自ずとその教育的貢献に限界をもうけていたのであった。

以上をまとめると、1910年の韓国併合以後も、愛国唱歌は、日本による熾烈な弾圧にもかかわらず、韓国人の間で抵抗の意志の表明として歌われ続けた。韓国唱歌は、民族系私立学校とキリスト教系私立学校において、民族独立の実現のための重要な科目とみなされ、熱心に教授された。こうした教育状況を脅威として受け止めた総督府と学部は、愛国唱歌に対する監視・取締りをさらに強化したが、民衆に広く浸透した韓国唱歌は、日本の弾圧に簡単に屈することはなかった。

## 終わりに

本稿では、19世紀末の西洋音楽の到来によって、日本と韓国が各々の歴史環境のなかで、どのように「音楽の近代化」を果たしていったのかについて検討した。その際、まず、日本と韓国に移入された近代西洋音楽の旋律や平均律などの音組織に注目し、それが学校制度を通して日本と韓国に移入されたことの意味について検討した。

近代西洋音楽の源流である讃美歌は、「特定の詩形が簡単にはめ込めるように、単純なリズムパターンを繰り返す<sup>79)</sup>」といった特徴があり、その旋律は、民衆が覚えやすく、歌いやすいつくりとなっている。平均律についても、歌唱の面で旋律と同様の効果があり、「まんべんなく音高が散らばって<sup>80)</sup>」るので、音を拾いやすいといった合理的・機能的な側面をもっている。

79 安田、前掲『日韓唱歌の源流』、152頁。

80 小方、前掲、69頁。

合理的な音律に基づいて作られた西洋唱歌は、コラールの歴史が実証しているように、誰でも歌いやすく、合唱しやすいといった特徴をもち、これは、国民統合という近代化に向けて邁進していた当時の日本にとって、きわめて利用価値の高いものとしてうつった。換言すると、明治初期の日本のエリートは、国民がみな同じ歌をうたうという行為が国民統合の面で大きな役割を果たすだろうと認識したのであった。

日本が洋楽導入を決めた背景には、早急に近代化を成し遂げなければならないといった時代要請があった。本論で示したように、当時の日本のエリートは、欧米諸国の学校教育で讃美歌を教材とした唱歌が重視されていたこと、欧米の諸国民国家において国歌が愛国心喚起の面で大きな役割を果たしていたことなどに注目し、音楽を近代国民国家の形成、国民の創出のために利用していこうと考えた。こうして近代日本は、国家要請に見合う西洋音楽の特性を積極的に利用し、学校制度を通じて音楽の近代化・大衆化への基礎を固めた。

植民地期以前の韓国では、讃美歌の旋律に愛国的な歌詞を付した韓国唱歌が、ミッション・スクールや民族系私立学校での音楽教育を通じてキリスト者や一部の知識人の間で広まった。その後日本の支配下におかれてから終戦までの間は、日本流に西洋化された日本唱歌の、特に軍歌のリズム形式の影響を受け、それらの曲に愛国的・排日的歌詞を付した唱歌が民族系私立学校を起点として民衆へと広まっていったのであった。つまり、韓国は、日本唱歌を通じて音楽の近代化・大衆化を経験したといえるのである。韓国の場合は、西洋音楽とその影響を受けた日本唱歌からの二重の影響を受けたという点で、より複雑な状況におかれていたが、独立運動家を中心とした当時の政治リーダーによって、民族系私立学校を中心に広まっていった愛国唱歌が、民族精神の十分に確立していなかった当時の朝鮮人を民族的に統合させるために積極的に利用されたことは否定しえない事実である。

まとめると、日本唱歌と韓国唱歌は、ともに讃美歌から音楽構造面における影響を受け、国民統合あるいは民族統合の面で政治的に利用されたという点では共通しているが、日本と韓国の近代化のスピードの相違が、その発展過程に大きく影響を与えた。つまり、日本がまず洋楽の導入によって音楽の近代化を果たし、その後、日本統治下におかれた韓国が、その日本音楽を通じて音楽の近代化を経験したということである。歌詞については、日本と韓国の唱歌ともに、愛国主義的・民族主義的な内容が色濃く表れ、各々の政治・社会状況が反映される形となった。

問題は、音楽の近代化・国民化の産物である日本唱歌が、当時の膨張主義の潮流のなかで、植民地教育として朝鮮に移入されたこと、つまり、国家の枠組みで「創成」された音楽が他民族の朝鮮人に強制的に教えられたというところにある。19世紀末に世界規模で生じた西洋音楽による非西洋音楽の西洋化・近代化という現象は、現代にも連綿とつながる音楽のグローバル化の起点であったといえるが、この時期は東アジアの国民国家形成期に重なっていたこともあり、そのことが日本の音楽文化の形成を国家主義的な方向に導く要因として作用した。日本の植民地唱歌教育が、朝鮮人に対する国家権力の濫用に結果したことは、そのような当時の東アジアをとりまく国際政治状況とも深く関連するところである。この意味で、近代日韓唱歌教育史を再考することは、日本の植民地主義に対する問いにもつながり、ひいては、日本の歴史的なあり方を世界史的視点から問い直すことにもつながるといえるであろう。